

平成26年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	発達障害児童生徒にみられる認知機能の制約と教育指導・支援
------	------------------------------

研究代表者

氏名 奥住秀之	所属 総合教育科学系・ 特別支援科学講座	職名 准教授
------------	----------------------------	-----------

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

発達障害者支援法の成立、特別支援教育の開始と推進、インクルーシブ教育への転換、診断マニュアル DSM の改正 (DSM-5 の発表) など、LD (学習障害・限局性学習症 (DSM-5))、ADHD (注意欠陥多動性障害・注意欠如多動症 (DSM-5))、ASD (自閉症スペクトラム障害・自閉スペクトラム症 (DSM-5))、DCD (発達性協調運動障害・発達性協調運動症 (DSM-5)) などの発達障害のある児童生徒の理解と支援の必要性がますます高まっている。また、発達障害の認知機能の特性を解明して、その制約に応じた教育的指導・支援を検討することが、学校教育現場、とりわけ通常の学級における教育活動において、ますます求められている。本研究は、発達障害児童生徒の認知機能の制約の特徴を解明して、教育的指導・支援法の手掛かりを発見することを目的として行われた。具体的には4つの研究を進めた。

第一は「発達障害児・者における視覚探索機能の特徴と支援」である (研究協力者: 大学院生・斎藤遼太郎)。視覚探索機能についてキャンセレーションタスクに着目し、発達障害児・者 (自閉症・LD、ADHD) を対象に行われた研究を概観し、整理した。

第二は「発達障害児・者の視空間性ワーキングメモリの特徴」である (研究協力者: 大学院生・大井雄平)。ワーキングメモリの中でも特に視空間性ワーキングメモリに注目し、発達障害児・者の視空間性ワーキングメモリの特徴に関する研究を概観した。まず、視空間性ワーキングメモリの指すところを確認した後、視空間性ワーキングメモリの代表的な評価方法を紹介し、発達障害児・者の視空間性ワーキングメモリの特徴を検討した研究を概観した。

第三は、「認知プランニングにおける内言の役割—二重課題パラダイムによるハノイの塔課題の成績とAQに注目して」である (研究協力者: 千葉大学研究員・平田正吾)。定型発達の成人に対して二重課題パラダイムによる「ハノイの塔」課題を行い、その成績の特徴について検討し、さらに対象者の自閉症特性の程度についての評価も行い、「ハノイの塔」課題の成績との関連を検討した。

第四に「自閉症スペクトラム障害児の立位姿勢に対する Light touch の有無と足位変化の影響」である (研究協力者: 大学院生・栗田晏代)。自閉症スペクトラム障害 (ASD) 児の立位姿勢に対する Light touch の有無と足位変化の影響について、身体動揺を指標として、定型発達者のデータと比較しつつ検討した。

今回の研究全般を通じて、認知特性とアセスメントとの関連についてもできる限り検討するようにした。実証データを収集し、実際の指導支援まで踏み込んだ研究は難しく、今後の課題として提起された。

## 研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。  
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

- 1) Hirata S, Okuzumi H, Kitajima Y, Hosobuchi T, Nakai A, Kokubun M. (2014) Relationship between motor skill impairment and social impairment in children with autism spectrum disorders. *International Journal of Developmental Disabilities*, 60, 251-256.
- 2) Hirata S, Okuzumi H, Kitajima Y, Hosobuchi T, Kokubun M. (2014) Dcrepancy between motor and cognitive control in adults with intellectual disabilities. *Journal of Intellectual Disability- Diagnosis and Treatment*, 2, 94-100.
- 3) Ikeda, Y., Okuzumi, H., & Kokubun, M. (2014) Effects of emotional response on the Stroop-like task in preschool children and young adults. *Japanese Psychological Research*, 56, 235-242.
- 4) Ikeda, Y., Okuzumi, H., & Kokubun, M. (2014) Stroop-like Interference in the Real Animal Size Test and the Pictorial Animal Size Test in 5- to 12-Year-Old Children and Young Adults. *Applied Neuropsychology: Child*, 3, 115-125.
- 5) Ikeda, Y., Okuzumi, H., & Kokubun, M. (2014) Inhibitory control in children with intellectual disabilities with and without autism spectrum disorders in animal size tests. *International Journal of Developmental Disabilities*, 60, 80-88.
- 6) Oi, Y., Ikeda, Y., Okuzumi, H., Kokubun, M., & Iwai, K. (2014) Effects of pointing movements on visuospatial working memory. *Asian Journal of Human Services*, 7, 16-22.
- 7) Oi, Y., Ikeda, Y., Okuzumi, H., & Kokubun, M. (2014) Involvement of eye movement in forward and backward recalls on a spatial working memory task. *International Journal of Psychophysiology*, 94, 239-240.
- 8) Oi, Y., Ikeda, Y., Okuzumi, H., & Kokubun, M. (2015) Corsi blocks task complexity effects in people with intellectual disabilities. *Total Rehabilitation Research*, 2, 22-29.
- 9) 奥住秀之（2015）発達障害児童生徒にみられる認知機能の制約と教育指導・支援．平成26年度東京学芸大学重点研究費研究成果報告書．